

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁵⁷⁷

「国民全員が苦しむ平等を」。希望は、戦争 ― 31歳フリーター

07年1月号の『論座』が「現在の貧困」という特集をおこなっている。その中で、ウェブサイト「深夜のシマネコ」(<http://t-job.vis.ne.jp>)を運営している31歳のフリーター、赤木智弘が、どこにも出口のない若い貧困層の憂鬱と怨念を吐き出している。『丸山眞男』をひっぱたきたい」という文章の末尾で、こう締め括っている。

《荏部直氏の『丸山眞男——リベラリストの肖像』に興味深い記述がある。1944年3月、当時30歳の丸山眞男に召集令状が届く。かつて思想犯としての逮捕歴があった丸山は、陸軍二等兵として平壤へと送られた。そこで丸山は、中学にも進んでいないであろう一等兵に執拗にイジメ抜かれたのだという。

戦争による徴兵は丸山にとってみれば、確かに不幸なことであっただろう。しかし、それとは逆にその中学にも進んでいない一等兵にとっては、東大のエリートをやイジメることができる機会など、戦争が起こらない限りはありえなかった。

丸山は「陸軍は海軍に比べ『擬似デモクラティック』だった」として、兵士の階級のみが序列を決めていたと述べているが、それは我々が暮らしている現状も同様ではないか。

社会に出た時期が人間の序列を決める擬似デモクラティックな社会の中で、一方的にイジメ抜かれる私たちにとっての戦争とは、現状をひっくり返して、「丸山眞男」の横っ面をひっぱたける立場にたてるかもしれないという、まさに希望の光なのだ。

しかし、それでも、と思う。

それでもやはり見ず知らずの他人であっても、我々を見下す連中であっても、彼らが戦争に苦しむさまを見たくはない。だからこうして訴えている。私を戦争に向かわせないでほしいと。

しかし、それでも社会が平和の名の下に、私に対して弱者であることを強制しつづけ、私のささやかな幸せへの願望を嘲笑いつづけるのだとしたら、そのとき私は、「国民全員が苦しむつづける平等」を望み、それを選択することに躊躇しないだろう。》

戦争のない平和が謳われる時代であれば、戦後そうであったように、丸山眞男は東大教官のエリートであり、軍隊の一等兵の男は学歴のない者として社会の底辺を浮き沈みしていたかもしれない。中には学歴にかかわらず、事業を成功させる者もあったかもしれないとしても、少なくとも丸山の人生と一等兵の男の人生とが交差する機会など訪れようもなかった。まして、一等兵の男が東大のエリートをやイジメることなど到底考えられなかった。しかし、戦争は平和な時代の常識を覆して、そんな非常識なことを可能に

したのである。底辺の人々にとっては唯一戦争のみが、社会の水面に大きく浮上できる機会であった。したがって、赤木のようなフリーターが掛け値なしに戦争を望んでいるとすれば、それは現在の社会に風穴を開けて、流動性をもたらしてくれる期待感からであった、と思われる。

いうまでもなく、戦時中及び敗（終）戦直後の混乱期は、社会が不安定な度合いだけ流動性は増し、社会が安定してくれば流動性は失われる。したがって、社会が成熟すれば流動性はなくなり、流動性がなくなるほど社会の安定性は増す。しかし、社会の安定が心地よく受け入れられるのは社会の上層であり、社会の下層にとっては社会の安定感とは社会の閉塞感の別名にほかならない。彼らに対して社会の中～上層へ這い上がる機会が与えられないまま、社会が安定すればたまったものではない。《それでも、経済が右肩上がりの時代は問題がなかった》と、赤木は言う。《流動性がなくとも、経済さえ右肩上がりであれば、給料は増え続けたのだ。給料が上がるということを通して、すべての労働者が報われていた》からだ。格差は存在していたが、勤労者の生活は向上し、結婚して家を購入し、子供を産んで家族関係を築くことができた。

《私たちだって右肩上がりの時代ならば「今はフリーターでも、いつか正社員になって妻や子どもを養う」という夢ぐらいは持てたのかもしれない。だが、給料が増えず、平和なままの流動性なき今の日本では、我々はいつまでたっても貧困から抜け出すことはできない。

我々が低賃金労働者として社会に放り出されてから、もう10年以上たった。それなのに社会は我々に何も救いの手を差し出さないどころか、GDPを押し下げるのだ、やる気がないのだと、罵倒を続けている。平和が続けばこのような不平等が一生続くのだ。そうした閉塞感を打破し、流動性を生み出してくれるかもしれない何か――。その可能性のひとつが、戦争である。》

可能性としての戦争、それを彼は求めているのだが、もちろん、戦争の破壊によって社会全体が低迷し、彼が望むような「貧困からの脱出」は不可能になるかもしれない。だがそれでも、彼のようなフリーターは「国民全員が苦しむ平等を」入手できて、少なくとも自分たちだけが苦しむ絶望感を味わわなくても済む。全員が貧困であれば我慢できるが、ある者は貧困状態から脱して、自分たちだけは《いつまでたっても貧困から抜け出すことはできない》状態にしいられつづけることが我慢できないのだ。その風穴として自分たちが戦争を切に望むことは、よくないことなのかと問いかけているのである。

《識者たちは若者の右傾化を、「大いなるものと結びつきたい欲求」であり、現実逃避の表れであると結論づける。しかし、私たちが欲しているのは、そのような非現実的なものではない。私のような経済弱者は、窮状から脱し、社会的な地位を得て、家族を養い、一人前の人間としての尊厳を得られる可能性のある社会を求めているのだ。それはとても現実的な、そして人間として当然の欲求だろう。

そのために、戦争という手段を用いなければならないのは、非常に残念なことではあ

るが、そうした手段を望まなければならないほどに、社会の格差は大きく、かつ揺るぎないものになっているのだ。》

戦争の《悲惨さは「持つ者が何かを失う」から悲惨なのであって、「何も持っていない」私からすれば、戦争は悲惨でも何でもなく、むしろチャンスとなる。

もちろん、戦時においては、前線や銃後を問わず、死と隣り合わせではあるものの、それは国民のほぼすべてが同様である。国民全体に降り注ぐ生と死のギャンブルである戦争状態と、一部の弱者だけが屈辱を味わう平和。そのどちらが弱者にとって望ましいかなど、考えるまでもない。

持つ者は戦争によってそれを失うことにおびえを抱くが、持たざる者は戦争によって何かを得ることを望む。持つ者と持たざる者がハッキリと分かれ、そこに流動性が存在しない格差社会においては、もはや戦争はタブーではない。それどころか、反戦平和というスローガンこそが、我々を一生貧困の中に押しとどめる「持つ者」の傲慢であると受け止められるのである。》

彼の主張は痛いほどよくわかるが、戦争によって「国民全員が苦しむ」のだろうか。「持つ者が何かを失う」ことになるのだろうか。持たない者は何も失わないのだろうか。失うのものが何もない者は、より一層失うことにならないだろうか。戦争によって「国民全員が苦しみつづける平等」を与えられるとすれば、それは日本全土が戦場になった場合であって、そうでない戦争であれば、またしても「国民全員が苦しみつづける平等」は遠のく。現在のイラク戦争を例にとれば、事態は明瞭である。イラク全土が戦場と化している現状では、なるほどイラク「国民全員が苦しみつづける平等」に見舞われているかもしれないけれども、攻撃を仕掛けているアメリカでは、「国民全員が苦しみつづける平等」ではなく、戦地に駆り出された貧困層のみが苦しみつづける不平等を味わわされている。

日本が戦争に巻き込まれた場合、イラク型になるのか、アメリカ型になるのか。いずれかだとしても、一般的にいった先進国の場合、その国土が戦場と化すことは考えられない。なぜなら、戦争による経済機能のマヒは当事国のみならず、世界中に大きな影響を及ぼすだろうからだ。したがって、日本が巻き込まれる戦争はアメリカ型である可能性が高い。もしそうだとすると、赤木が望む「国民全員が苦しみつづける平等」は叶えられず、持たない者が戦場に駆り出されて命を失う危険にさらされることになってしまう。残念ながら、フリーターの絶望は戦場においてもより過酷に貫徹されるにちがいない。戦争に唯一希望を求めるしかない赤木らフリーターの悲しき夢を打ち砕くつもりはないが、平和であれ戦争であれ、先進国においては下層は下層として終始することを忘れてはならない。やはり決定的な流動性を生み出そうとするなら、「革命」以外にあるまい。自分たちのような惨めな貧困層を二度と輩出しないと決意するなら、真の「革命」をこそつくりださなければならない。

もちろん、彼は本当は戦争ではなく、社会の理解を求めているのだ。社会の理解を得

られないのであれば、戦争を望むしかあるまいと主張しているのだ。やはりここでの最大の問題は、「革命」を望むしかない方向へ彼らが向かわないところにあるにちがいない。なぜ、彼らは「革命」を志向しないのか。それは左傾勢力が体制化してしまっているからだ。《平和な社会を目指すという、一見きわめて穏当で良識的なスローガンは、その実、社会の歪みをポストバブル世代に押しつけ、経済成長世代にのみ都合にいい社会の達成を目指しているように思えてならない。このようなどうしようもない不平等感が鬱積した結果、ポストバブル世代の弱者、若者たちが向かう先のひとつが、「右翼化」であると見ている。》したがって、弱者である若者たちからすれば、不平等感を募らせる平和な社会の維持を目指す左傾勢力よりも、現在の平和な社会に異議を唱えつづける保守勢力のほうが波長が合うのである。

《また、彼らが不満や被害者意識を持っているというなら、なぜ左傾勢力は彼らに手を差し伸べないのか。若者にしてみれば、非難の対象はまさに左傾勢力が擁護する労働者だ。だから若者たちはネオリベ政府に「労働者の権利を奪い取って、おれたちに分けてくれ」と期待してしまうのだ。小泉前首相が「郵政職員26万人の既得権を守って、何の改革ができるか!」と叫んで若者の支持を集め、衆院選で圧勝したことは記憶に新しい。

確かに、右傾化する若者たちの行動と、彼らが得る利益は反しているように見える。たとえば、一時期のホリエモンブームなどは、貧困層に属する若者たちが富裕層を支持するという、極めて矛盾に満ちたものだった。小泉政権は改革と称して格差拡大政策を推し進め、安倍政権もその路線を継ぐのは間違いない。それでも若者たちは、小泉・安倍政権に好意的だ。韓国、中国、北朝鮮といったアジア諸国を見下し、日本の軍国化を支持することによって、結果的にこのネオコン・ネオリベ政権を下支えしている。

そこで当然、「それは本当に、当の若者たちを幸せにするのだろうか？ 安直な右傾化は、若者たち自身の首を絞めているだけなのではないのか？」という疑問が提示されることになる。だが私は、若者たちの右傾化はけっして不可解なことではないと思う。極めて単純な話、日本が軍国化し、戦争が起き、たくさんの人が死ねば、日本は流動化する。多くの若者は、それを望んでいるように思う。》

左傾勢力が彼らの視野に、フリーターを収めていないことは明白である。だからといって保守勢力も彼らの視野に収めているわけではない。フリーターの嫉妬の感情を煽り立て、利用するだけで、彼らを支援するわけではないのははっきりしている。左傾勢力のダメさがわかっていたとしても、いくらかの期待を寄せていた小泉前首相の振る舞いが欺瞞的であるのは、衆院選後しばらくしてから彼らの目にはっきりと映った筈だ。どっちもどっちであった。つまり、「安直な右傾化は、若者たち自身の首を絞めているだけなのではないのか？」と、左傾勢力の危惧する声も、安直な平和な社会の維持のスローガンも、若者たちにはいずれも地獄であった。同じ地獄なら、どちらがマシか、というのが彼らの問題であった。保守勢力が日本の軍国化を押し進め、戦争を起こしてくれ

そんな点で、《若者たちは、小泉・安倍政権に好意的》であったのだ。

フリーターが右傾化する理由も、ネオコン・ネオリベ的な小泉・安倍政権に好意的な理由も、赤木の文章からはよくわかる。左傾勢力と保守勢力のどちらが社会の流動化に取り組もうとしているか、が問題の出発点であった。《平和な社会を目指す》左傾勢力は、社会の流動化を望んでいなかった。戦争をも射程に入れている点で、小泉・安倍政権のほうが社会の流動化を押し進めようとしていた。フリーターが左傾勢力よりも保守勢力を支持するのは、社会の流動化の一点であった。だが保守勢力が好戦的であるとしても、彼らがフリーターの望むような社会の流動化を押し進めることになるかどうかは、前述したように全く疑問であった。もし左傾勢力が社会の流動化を一気に押し進める「革命」を志向するようになれば、フリーターは当然彼らを支持すると考えられる。その代わりに左傾勢力は合法活動から非合法活動へと転換しなければならない。もちろん、そんなことは考えられないから、フリーターは左傾勢力を敵対視して、戦争にいくら問題があっても保守勢力を支持しようとするのだ。

ここで、フリーターたちが大きな問題点をかかえているのが浮かび上がってくる。それは、彼らがどうしてもいまある政治勢力に依存せざるをえない脆弱さである。本当の意味で社会の流動化を望むなら、革命以外にありえないのは自明であるから、戦争ではなく、あくまでも「革命」の遂行の観点から問題を組み立てるべきなのだ。現実的にそんな政治勢力が存在していないのが明白なら、彼らこそが社会の流動化を惹き起こすために、「革命」を遂行する勢力として登場すればよい。要するに、社会を流動化させなければ、保守勢力に依存せずに、自分たちの力でそうすればいいのだ。左傾勢力も保守勢力も当てにせず、それを自覚した上で、自分たちの力だけで問題を組織化する必要があるだろう。それができないのに、保守勢力に依存してもなにひとつ問題の解決にはならない。

しかしながら、「革命」が現実的ではありえないのははっきりしているし、いまの若者の発想から遠い発想であることもはっきりしている。だいいち、フリーター同士が社会を流動化させるために、結合して立ち上がることなど到底考えられない。筆者の赤木自身、若者の右傾化や、「希望は、戦争」などと左傾勢力が目を剥くような言葉を記してみせるものの、彼がどこにも行けないフリーターに対する社会の理解を求めていることには変わりはない。バブル崩壊以降の就職難に直面したポストバブル世代の彼が強調するのは、《社会に出た時点ですでに労働市場は狭き門になっており、チャンスそのものがなかった》という機会の不平等である。就職難の年に卒業して一度就職を逸してしまえば、二度とマトモな仕事につけない不運^なを嘗めなくてはならないのだ。

《「就職して働けばいいではないか」と、世間は言うが、その足がかりはいったいどこにあるのか。大学を卒業したらそのまま正社員になることが「真っ当な人の道」であるかのように言われる現代社会では、まともな就職先は新卒のエントリーシートしか受け付けてくれない。ハローワークの求人は派遣の工員や、使い捨ての営業職など、安定し

た職業とはほど遠いものばかりだ。安倍政権は「再チャレンジ」などと言うが、我々が欲しいのは安定した職であって、チャレンジなどというギャンブルの機会ではない。

そして何よりもキツイのは、そうした私たちの苦境を、世間がまったく理解してくれないことだ。「仕事が大変だ」という愚痴にはあっさりと首を縦に振る世間が、「マトモな仕事につけなくて大変だ」という愚痴には「それは努力が足りないからだ」と嘲笑を浴びせる。何をしてもいいか分からないのに、何かをしなければならないというプレッシャーばかり与えられるが、もがいたからといって事態が好転する可能性は低い。そんな状況で希望を持って生きられる人間などいない。》

彼は自分の一日の繰り返しを次のように描いてみせる。

《夜遅くにバイト先に行って、それから8時間ロクな休憩もとらずに働いて、明け方に家に帰ってきて、テレビをつけて酒を飲みながらネットサーフィンして、昼頃に寝て、夕方頃目覚めて、テレビを見て、またバイト先に行く。この繰り返し。》

月給は10万円強。北関東の実家で暮らしているので生活はなんとかなる。だが、本当は実家などで暮らしたくない。両親とはソリが合わないし、車がないとまともに生活できないような土地柄も嫌いだ。ここにいると、まるで軟禁されているような気分になってくる。できるなら東京の安いアパートでも借りて一人暮らしをしたい。しかし、今の経済状況ではかなわない。30代の男が、自分の生活する場所すら自分で決められない。しかも、この情けない状況すらいつまで続くか分からない。年老いた父親が働けなくなれば、生活の保障はないのだ。》

自分たちはこれからもずっとこんな《屈辱を味わいながら生きていく》であろうのに、《経済成長著しい時代に生きた世代（以下、経済成長時代）の多くは、我々にバブルの後始末を押しつけ、これからもぬくぬくと生きていくのだろう。なるほど、これが「平和な社会」か、と嫌みのひとつも言いたくなってくる》と記し、自分たちに対する社会の理解不足を、たとえば06年7月に放送された、NHKスペシャル「ワーキングプア 働いても働いても豊かになれない」に見出す。

《番組では、働いてもそれに見合った給料が得られず、生活もままならない人たちが、ワーキングプアとして並列的に紹介されていた。地方から東京に出てきて仕事を探す、派遣でさまざまな土地をたらい回しにされたうえに、ホームレスとなってしまった30代の若者。会社をリストラされ、一家を養うためにバイトをいくつもかけ持ちしている元サラリーマン。イチゴの栽培が赤字で、家族全員の収入を合算してなんとか生活する農家。そして、一時は人を雇うほどの町一番の仕立屋だったが、今では小さな直しの仕事しかなくなってしまった職人。年金は妻の入院費に消え、生活保護を受けようにも、「妻の葬儀代に」と手をつけないでいる100万円の貯金の存在が、生活保護を受給するにあたっての障害になっているという。》

この番組では、文字通り、ワーキングプアの括りかたで、「元サラリーマン」「イチゴ

農家」「仕立屋」といった経済成長世代と、「ホームレスになってしまった30代の若者」というポストバブル世代が込みにされて取り上げられているのだ。《家庭を手に入れ、社会的にも自立し、人間としての尊厳をかつて十分に得たことのある人たち》と、《社会人になった時点ですでにバブルが崩壊していて、最初から何も得ることができなかった》若者たちを、同じ弱者として捉える視点に彼は異和感を覚える。つまり、途中の敗者と最初からの敗者とは、そもそも前提から異なっているのではないか、ということだ。

《特に、仕立職人が、妻の葬儀のために手をつけずにいる貯金のために、生活保護を得られないことについて、識者が「妻の葬儀の費用を自力でまかないたいというのは人間の尊厳であり、それを捨てないと生活保護を得られないことに問題がある」と述べていたことが気にかかる。それが尊厳だというのはなら、結婚して家庭を持つことや100万円の貯金など夢のまた夢でしかない我々フリーターの尊厳は、いったいどこに消えてしまったのか。》

社会からずり落ちて弱者となった経済成長世代と、初めから社会から締め出されているフリーターの若い世代とが並列されていることに納得しがたさを感じる赤木は、人間の尊厳を堂々と主張している前者をみて、自分たちは人間の尊厳を主張できる手前の状態に置かれていると指摘する。そう、社会の理解は自分たちのところまでどうしても届かない。だから、そんな社会は一旦破壊してしまえ、となる。破壊（戦争）によって惹き起こされる流動性に期待するのだ。ここで引っかかるのは、その発想である。若者たちが右傾化するのには、保守勢力こそが戦争によって今の「平和な社会」をぶっ壊してくれるという期待を抱かせてくれるからだ、というのが彼の説明であった。その説明が若者の鬱屈した気分をどこまで映し出しているのかはわからないが、若者は保守勢力への期待によって右傾化しているのではなく、そのように発想してしまうことにおいて右傾化しているようにみえる。

戦争に巻き込まれようとすることによって政治的、社会的な障害を一気に除去しようとする保守勢力の思惑に、社会の流動性を期待する若者が乗っかろうとしていることが右傾化なのではなく、自分たちのようなフリーターを固定し、温存している政治・社会的な構造に粘り強く立ち向かわずに、障害を一気に除去してほしいという願望を募らせることにおいて右傾化しているのである。フセインを除去しさえすれば、米国流の自由と民主主義を即座に根づかせることができると考えて、イラクを攻撃したブッシュ政権を想起させずにはおかないが、その発想と通底していることにおいて右傾化しているのだ。右傾化とは思考が遮られて、思考以外の狂熱にとりつかれることではないのか。

山城むつみは『新潮』の連載コラム（07・1）で、《イラクやパレスチナに介入するアメリカの政策はどこかSSRIに似ている》と言って、《ブッシュはイラク戦争を再考するのに精神分析など要らないと言ったが、介入の口実となった「原因」（大量破壊兵器の存在）の同定がどれほどいい加減であってもターゲットとなる政治経済の中核

部に選択的に作用するサプリメントを外部から軍事的に有効に投与した結果として邪悪な独裁と専制が即効的に除去され「健全な」自由と民主主義が維持されるならこれを投与し続けることに何の問題があるのかという「正論」は理想の向精神薬を夢想する善意のイデオロギーと奇妙に類比的である》と書く。

SSRI（選択的セロトニン再取り込み阻害薬）とは、急激に蔓延している抗うつ薬である。《抗うつ薬市場は1998年に150億円だったのが、2001年に500億円に激増しており、その85パーセントである425億円がこのSSRI系の抗うつ薬》らしいが、《「うつ」とは臨床的にきわめて輪郭のはっきりしない概念》であるにもかかわらず、《「うつ」だと診断されるから抗うつ薬が投与されるのではなく、抗うつ薬を投与してそれが効いたから「うつ」だと診断されるという転倒》が起こっていることを前提にして、山城は論をすすめる。《そこまでゆかないとしても、もしSSRIがなかったら「うつ」とは診断しなかったかもしれない場合でも、現にSSRIがあるから「うつ」と診断することが多くなるということが現場にはあるはずだ。統計における「気分障害」の患者の激増の秘密はそこにある。うつ病が増加したからSSRIの販売が促進されたのではない。SSRIの販売が促進されているからうつ病が増加したのだ。》

「うつ」と抗うつ薬の関係の転倒は、イラクが大量破壊兵器を保有しているから攻撃されるのではなく、攻撃されることでもはやイラクは大量破壊兵器を保有する能力を持てなくなるといふ転倒とよく似ている。したがって、アメリカに対する敵対国が増加したから、アメリカの攻撃が促進されるのではない。アメリカの攻撃が促進されているから、敵対国が増加したのだといわざるをえなくなる。《「うつ」はもはや「啓発」されるべきイデオロギーなのである。そのような「うつ」にとって治療とは、治癒とはどういうことなのか》と問うて、「マニュアルに従って、よりよく治療することはできる。だが、何を治療しているかは、ますますわからなくなっている」という言葉が、片田珠美『薬でうつは治るのか？』から紹介されている。もちろん、うつ病診断があいまいなままに投与されることで、さまざまな弊害や薬害が惹き起こされることは充分考えられるが、では弊害や薬害が生じなくなれば、投薬はなんの問題もなくなるかといえ、けっしてそうではない。

「そういう薬がないがために社会生活から脱落し部屋に引きこもって低迷し沈滞している不幸な人が現に少なくないのだ。本当に全く何の薬害もなく『うつ』の症状が消えて服用者が『元気』を取り戻し社会生活や家庭生活を健全に営めるようになる向精神薬が開発されたなら、それはのどにホールズが爽快感を与えるように脳にハッピー・ドラッグが『精神』に与えてくれることになったということの意味する。酒や嗜好品と同列のものとして一般の人々が手軽に服用できるようにして何の問題もないではないか」という声が有力になってくることで、看過されていく本質的な問題とはなにか。社会生活や家庭生活を営むなかで「元気」を取り戻すのではなく、開発された向精神薬によって「元

気」を取り戻すことができるような人間の「精神」とはなにか。「精神」が問われているだけではない。《人間が澁刺と生きている生が、もはや補給^{サブライ}された生でしかない社会とはどういう社会なのか》も、問われているのだ。

向精神薬を投与されてまで我々は澁刺と生きなくてはならないのだろうか。当然、そんな疑問が湧き起こってくる。もちろん、ここで向精神薬が問題なのではない。「元気」な生を送るためには向精神薬まで投与しなければならないという強迫観念が、イデオロギー化していることが問題なのである。だから山城は、《我々は「澁刺と生きる屍」になろうとすることを強いられていないかという自問は忘れるべきではない》というのだ。

ここで彼は06年に生誕150周年だったフロイトに因んで、《90年代にプロザックなどのSSRIが爆発的な人気で服用されるようになった》ために、《精神分析は人文科学における解釈理論として今なお余命を保っているものの、臨床の現場では壊滅状態にある》ことを明かす。SSRIの服用で「うつ」が晴れて快活になるなら、《金も時間もかかるし煩わしい手続きの多い精神分析をわざわざ選ぶ患者はいない》のは、当然だからだ。

もともと心理学者ではなかったフロイトが、《神経病理学の医師として開業したとき彼の治療の武器として薬物のほかには電気治療と催眠術があったが、彼はやがてそれらの使用を断念してゆく。そうやって、ついに言葉だけに頼って治療しようとしたときそこから精神分析の地平が拓かれるのだ。その前夜の失語症研究が大腦と言葉の関連についてのものだったのは偶然ではないだろう。フロイトの精神分析は即効性が期待される飛び道具を悉く棄てて言葉の力を再発見したところに生まれて来たのである。ならば、なぜこの精神病理医がこんな遠回りをせねばならなかったのかを問うことなく、ただ、SSRIの即効性（ヒーラーによればそれもありあやしいのだが）を後ろ盾に精神分析の無効性を断罪しても始まらないだろう》と書いて、山城は患者としての人間にとっての治療とはどういうことか、という根本的な問題の前に立ち尽くしていたフロイトの場所に踏み入ろうとする。

《そこには、生身の人間を相手にしての治療において治療とはどういうことなのかについて執拗で厳格な自問自答があったはずである。すくなくとも、それは単に症状が消えるということではなかった。症状が消えても患者自身の内部にある「原因」がそのままなら症状は必ず別の形で再び表れる。しかも、外科ではないから「原因」を見出しても切除してやるというわけにはいかない。フロイトが患者に求めたのは分析医との言葉のやりとり、すなわち対話を通じて患者自身にその「原因」と向き合わせることであった。それは患者にとってしばしば不快で憤激のもととなる手続きだが、フロイトにとって治療とは、その抵抗を克服し患者自身の内部にあって本人には見えない「原因」を分析医という他者において正視できるようにすること、つまりその強い不快に対する耐性を育てることによって「原因」と患者自身との関係を構造的に変えてしまうことだったのである。》

治療において治療とはなにか。どのような状態になったとき、治療したことになるの

か。症状が消えたとき、治癒したといえるのだろうか。もしそうであるなら、医者は症状が消えることに全力を尽くせばよいことになる。SSRIのような向精神薬が競って開発されることになるだろう。しかし、薬は薬に依存させる点で必ず薬害を惹き起こす。それだけでなく、薬による治癒は本当に治癒したことになるのか、という疑問を当然生じさせる。なぜなら、薬は症状に向かうだけで、症状としてあらわれる「原因」には向かわないからだ。「原因」は生きているかぎり、別のかたちで症状を噴出させる。そうすると、症状が問題なのではなく、症状としてあらわれてくる「原因」が問題であることに気づかずにはいられなくなる。薬ではけっして効かない「原因」に触れて、「原因」そのものを治癒の対象とするのは、一体なにか。患者自身に他ならない、というのがフロイトの考えだった。

「原因」をかかえこんでいるのが患者自身であったなら、患者以外の誰にもその「原因」をどうすることもできなかった。医者ができることは症状をなくすことではなく、患者にあなたを治癒するのはあなたしかいない、と伝えることだった。《フロイトが患者に求めたのは分析医との言葉のやりとり、すなわち対話を通じて患者自身にその「原因」と向き合わせることであった。》いうまでもなく患者は自分がかかえこんでいる「原因」を認めたがらない。なぜなら、「原因」とは紛れもなく自分自身であり、「原因」を認めることは自分自身を、そのように生きてきた自分自身のすべてを否定しなければならなくなるように感じられるからだ。「原因」と共に生きてきたのだから、「原因」を生みだすようにしてこれまで生きてきたのだから、そこに異和や反撥が生じるのは当然であった。《フロイトにとって治癒とは、その抵抗を克服し患者自身の内部にあって本人には見えない「原因」を分析医という他者において正視できるようにすること、つまりその強い不快に対する耐性を育てることによって「原因」と患者自身との関係を構造的に変えてしまうことだった》という指摘は、「敵」は自分の中に潜んでおり、自分の中の「敵」と対話できるようになったとき、自分の中の「味方」に変わってしまったということを想起させる。おそらく「原因」とは自分を自分たらしめている核のようなものであるが故に、自分にとって「原因」をなくすことはできない。障害として自分の前に立ちあらわれる症状を、障害としてではなく逆の、自分を勢いづかせる症状として噴出させるように、「原因」を変えることができるだけだ。「原因」を正視できるようになることは、患者が自分の弱点を知るようになることであり、そのとき「弱点」はもはや「弱点」ではありえなくなっている。

もし治癒ということがそのようなことであるなら、治癒とは治癒へと向かうプロセスにはほかならなくなり、治癒という到達点は見えなくなってしまう。《精神分析は理論的には非常に興味深いがこれによって全快させた症例を挙げてみてくれないかと詰め寄る人には、我々の治療成果はフランスのルルドの泉のほどには靈感あらたかだとは思っていませんよと答えようと言っ》たフロイトに触れて、山城は、《いや、未だ治癒には至

っていないという事実の認知は精神分析の本質の一部をなしていたと言ってもいい》と断言する。推測の域を出ないかもしれないが、フロイトは患者に向き合えば向き合おうほど、人間自身が深い闇に覆われた病そのものであり、治癒の不可能性に立ち会わざるをえなかったようにみえる。人間という病の底なしの井戸に踏み入って、フロイトは自分のしていることの無意味さをつくづく味わっていたかもしれない。

治癒が遠く患者の治療の中で、フロイトは一体なにに突き当たっていたのだろう。彼は「精神の手触り」に突き当たっていた、と山城は言う。向精神薬の投与によって「うつ」の症状が消え、薬害もないとすれば、この上ないハッピーということになるが、《たしかに人間の原理が快であるならば、そのとおりでろう。しかし、人は快よりも不快を求めることがある、いや、不快の中にこそ快を求めることがあるのが人間なのだ、というのがフロイトの洞察だった。これこそが、薬物を棄て電気治療を棄て催眠術を棄てて精神分析の途を拓いた最初期から、『人間モーセと一神教』を書いて、欲動を自ら断念する人間の奇妙な「精神性」に目を瞑った最晩年に至るまで、診察室で生身の人間と言葉だけを頼りにやりとりしながら彼が患者に認め続けた精神の手触りだっただろう。安全無害でさえあれば向精神薬を投与して「精神」を賦活し快活に生きさせることに何の問題があるのかと考える研究者や医師に欠けているのは精神のこの手触りである。》

「精神」は苦難を求めることがある、そしてその苦難の中に喜びを見いだそうとする、と言っても同じことだ。快が及ぼす苦痛に耐えられなくなる《人間の奇妙な「精神性」》に向き合い続けたフロイトの思考には、《人間の精神に向き合う基本的な手触りがある。それさえ真摯に受け止めるなら、精神分析医はフロイトの理論も技法もすべてかなぐり捨てていい。むしろ、フロイトに拘泥することなくゼロから徒手空拳で理論と技法を創始すべきだ。SSRIが席卷し窮地に立たされている今日の精神分析に求められているのはそういう覚悟だろう。「フロイト」を産み落とすためにフロイトが百年前に自身に迫ったのはまさしくそのような覚悟だった。「フロイト」を捨て去ることのできる新しいフロイトが産まれて来るとすれば、百年前と同様こういう窮地からだろう》という山城の言葉がしかし苦しいのは、《それさえ真摯に受け止めるなら》という条件そのものが非常に困難になりつつあるからだ。

「フロイト」を捨て去る中からしか新しいフロイトは産まれてこない、という声を深く聞きながら、もう一度フリーターの赤木智弘が置かれている流動性なき社会の澁みへと戻ってなくてはならない。社会の流動性を求めるために彼が希望する戦争とは、自分を不快から抜け出させるために授与するSSRIにほかならない。そこに欠けているのは、社会ではなく自分自身を流動化させる視点である。戦争を希望する自分から逸脱していく自分を引きずりだそうとする言葉であり、社会の動きに依存しない覚悟なのだ。

「国民全員が苦しみつづける平等」を望むより、「自分が苦しみつづける不平等」の中に快を見出すことが、生きるうえで真に重要なのである。 2007年1月19日記

